

湖羊<sup>フーヤン</sup>を「存じだらうか。私たちが一五年以上もフィールドとしている中国の長江下流の水郷地帯で飼育されているヒツジ<sup>ヒツジ</sup>のことである。炭鉱街生まれの私は小さくころに柱につながれているヤギに恐れを抱きながら、大人になって一九九〇年代の韓国農村調査で真っ黒いからちやいやギが農家の納屋の上ではしゃいでいるのを目にしたりしてきました。しかし、ヒツジ<sup>ヒツジ</sup>とはあまり身近な存在ではなかった。そんな私が、間近ではじめて見たヒツジは草原ではなく、長江<sup>チチ</sup>アルタの島<sup>コウ</sup>というの小屋住みのヒツジ、そ

う「閉じ込められたヒツジたち」であつた<sup>(註1)</sup>。土地は狭く水田と桑畠だけであり、草地などあるわけがなく、通年の食餉には道端のわずかな野草と余った桑葉が与えられる<sup>(写真1)</sup>。子羊の皮は湖羊羔皮<sup>フーヤンガウビ</sup>として世界的に有名であり、「濡れ子」や場合によつては胎児から作られた鞣革<sup>ハラシカ</sup>であり、上海から世界に輸出された。驚くべき羊飼いである。

その後、中央アジアのキルギスに行つたり、中国の内モンゴルに行つたりして、遊牧ないし放牧<sup>ヒツジ</sup>といふ本来のヒツジの飼い方に馴染むようになつてきました。キルギ

スでは、一九九一年のソ連からの独立後、土地の七五%が農村住民に配分されたが、決まって彼らは数頭の牛と一〇頭ばかりのヒツジを飼養している。夏には村の牧夫がヒツジをひとまとめにして、標高二、〇〇〇mの高地に広がる夏营地で群飼いをする。草を食むヒツジを小さな男の子が馬を乗りこなして行進させる姿は確かに絵になつてい<sup>(註2)</sup>。

中国の内モンゴルには一九九一年に留学生のアドントヤなどと彼女の実家で一日ばかり調査を行つた。東部の赤峰市ダムガチャ(村)であるが、ここでは水平の遊牧を行つていた。草地分割からしばらく経つた一〇〇〇初年代には次第に草地の囲い込みが行われ、ヒツジの大きな群れでの放牧は見られなくなつている<sup>(註3)</sup>。調査の歓迎の宴ではゲルの食卓に、さつままで跳ねていた一頭のヒツジが山のよくな茹で肉として供され、彼らの文化の

## ヒツジをめぐる冒険

み  
観察

一般社団法人 北海道地域農業研究所  
所長 坂下 明彦



写真1 閉じこめられたヒツジたち  
開弦弓村周仁昌宅 2006年9月10日



写真2 冬のヒツジたち  
内モンゴル達木ガチャ 2022年3月15日

神龜となつてゐることを実感した。写真2は彼女の兄に送つてもらつた現在の「冬のヒツジたち」である。通信も便利になつた。

便利と言えば、統計処理も同じである。ヒツジの世界的な飼養の分布を調べようと思い立つたが、以前なら図書室に集計用紙を持ち込んで一週間ぐらいかかった表が、一時間でできあがるのだ。FAO（国連食料農業機関）のFAOSTAT（データベース）にアクセスして、ヒツジと頭数、地域、年次を入れると、瞬く間にエクセルにデータをダウンロードできる。これを加工したものが表1である。

ヒツジは、旧大陸、新大陸を問わず、広範囲に飼養されている。総頭数は一二億二、九〇〇万頭であるが、地域別みるとアジアが五億一、七〇〇万頭で四三%を占め、次いでアフリカが四億八〇〇万頭で二三%を占めている。続いてヨー

ロッパの一億一、八〇〇万頭、一〇%、オセアニアの九、三〇〇万頭、八%となり、アメリカの八、三〇〇万頭、七%が最も少ない。

最大の飼養地域であるアジアのうち、東アジアは中国、モンゴルなどで一億頭近くであり、一六%を占める。中国は一億六、三〇〇万頭で世界第一位の飼養頭数を誇る。両国ともモンゴル高原がその中心である。ちなみに、日本は一四五、二六六頭と桁違ひに少ない。次が南アジアであり、インド、パキスタンなどで一億六、〇〇〇万頭、一三%を占める。インドは単独で七、四〇〇万頭であり、中国について第一一位である。このほかに、西アジアと中央アジアの遊牧地帯がそれぞれ八%、五%であり、合わせると南アジアに匹敵する。東南アジアはインドネシアを除くと少ない。このようにアジアが拠点であることは間違いない。

続くのがアフリカであるが、ここでは五つの小地域に飼育頭数がバランスしている。地中海沿岸が古くからの飼養地域だろうが、アフリカ大陸全体に拡大していく、南アフリカも大きな産地である。一、五〇〇万頭以上の飼養頭数規模の国は一〇カ国に及んでいて、アジアの九カ国を上回っている。次はヨーロッパである。

日本の羊の輸入元としてはオセアニアが多いが、地域的には九、三〇〇万頭で多い。日本の羊の輸入元としてはオセアニアの名残なのか、三、四〇〇万頭も飼養されている。地中海沿岸の飼養が多そうであるが、スペインより、ロシアのほうが多い。

八%、地域的には第四位である。ただし、オーストラリアとニュージーランドに集中しており、オーストラリアは六、六〇〇万頭で国別では世界第三位である。最後がアメリカであり、ここでは南アメリカに集中しており、特にブラジル、アルゼンチンが多い。

表1 羊の地域別頭数（2019年）

地域	頭数	比率
アフリカ州	407,653	32.9
東アフリカ	106,110	<b>8.6</b>
中部アフリカ	42,236	3.4
北アフリカ	110,981	<b>9.0</b>
南アフリカ	25,526	2.1
西アフリカ	122,800	<b>9.9</b>
アメリカ州	83,350	6.7
北アメリカ	6,058	0.5
中央アメリカ	9,357	0.8
カリブ	2,076	0.2
南アメリカ	65,859	<b>5.3</b>
アジア州	527,186	42.6
中央アジア	58,381	4.7
東アジア	195,943	<b>15.8</b>
南アジア	160,194	<b>12.9</b>
東南アジア	19,348	1.6
西アジア	93,319	<b>7.5</b>
ヨーロッパ州	127,912	10.3
東ヨーロッパ	36,043	2.9
北ヨーロッパ	42,507	3.4
南ヨーロッパ	39,099	3.2
西ヨーロッパ	10,263	0.8
オセアニア	92,619	<b>7.5</b>
合 計	1,238,720	100.0

注) FAOの統計(FAOSTAT)による。

身近な存在である。放牧を中心とする飼養方式であり、加工型畜産とは大局的な存在であり、食文化としても独自のものを作っている。世界の肉生産量を同一時代で見ると（「〇一九年年）、全体が三億六〇〇万トンである。つづいて鶏肉が一億一、八〇〇万トン、豚肉が一億九〇〇万トン、牛肉が六、八〇〇万トンであり、羊肉は九〇〇万トンと二・一%に過ぎない。ただし、五〇年前の一九七〇年では全体が九、二〇〇万トンの水準であり、鶏肉は一、二〇〇万トン、豚肉も三、六〇〇万トンに過ぎず、これらが急速に増産されたことがわかる。つまり、畜肉の増産は加工型畜産に多くを依存しているのである。この時点では羊肉は六〇〇万トンであったが、割合は六・〇%を占めていた。

このように、ヒツジは増加傾向にあるといつものの、加工型畜産に押されて割合は減少しているが、これからは環境に

寄り添った飼養でありSDGsの後押し

注

がなされよう。日本では北海道名物のジンギスカンが大宗であるが、欧州では高级肉に位置づけられる。日本でも、「ラムチョップ」などがスーパーの店舗におかれ、

家庭での消費も徐々に増えており、今後の地位向上が見込まれる。もちろん、ヒツジは肉のほかに羊毛生産という大きな役割も果たしており、その存在は大きなものがある。

（注1）菅豐「閉じこめられたヒツジたち—中国江南農耕社会のヒツジ飼育から見た商品経済の発展」東京大学『東洋文化研究所紀要』<sup>135</sup>、一九九八

（注2）本誌123号「キルギスからの贈り物」を参照のこと。

北海道でも「羊飼い」と称する御仁が増えており、なかなかユニークな人材そろいのようである。青春小説とはいかなが、このワクワクする動物をめぐる冒険をもう少し続けてみたいものである。

（注3）アドントヤ・坂下明彦・正木卓「モンゴル牧民の分割相続と家畜飼養形態の変化—赤峰市達木ガチャーの実態調査から—」『フロンティア農業経済研究』24巻1号、印刷中

ひょっとすると、わが家のユルタの周りにヒツジの群れを見ることができるかもしない。